科目区分：家政教育専修、生活環境コース（受講生数 12 名），
授業科目：食教育論（15 回分（宇高担当部分））（最終報告書）

家庭科とは如何なる教科か？

食のグローバル問題と個人生活の接点に目覚める授業の組立て

家政教育講座・宇高順子

１．授業の概観

本授業は、家政教育専修および生活環境コースの 3 年次後期自由選択科目である。

学部の課程再編成と定年との関係で、今年度が最終開講年度となった。最後の授業報告書なので、これまでの自分の授業への振り返りと授業観をまじえて報告する。

授業の目的としては、食に関する現代の地球・国レベルの問題、個人の食生活および食育について広く学ぶことにより、自分の食行動を、地球・国・個人レベルの課題解決につなげて考える等を掲げた。

授業内容は、主食の重要性、世界の人口・食糧問題、食料生産方法の変遷と健康・環境（農薬、遺伝子組換え、持続可能な農業のあり方）、国際貿易交渉と食料問題、食料自給率、食生活史と健康（日本・外国）、今後の食料生産・食文化のあり方、グローバルな社会問題を生活者の立場から考えるゲーム、食育等、幅広く、奥が深いテーマを揃えた。

・授業内容への想いと授業作りの工夫

本授業内容は、私が学生時代から強い関心があった。すなわち、食に関する個人の健康問題と共に、環境や食料問題といったグローバルな問題について、個人ができることは限られていると思われがちであるが、生活者が自覚して行動すれば大きな力になる。そして、個々の生活者が、消費者としての社会的責任と、経済や産業ひいては環境や世界の共存に及ぼす影響に目覚め、世界をよりよい方向に導くことを目指した生活行動ができる人材を育てる、これが家庭科が担うべき役割だと感じ続けてきた。そのような授業作りをしたいと念願してきた。

修士修了の若輩で本学に就職して、本授業を構想し、このテーマに取り組もうとしたが、初期の頃は学生にテーマを与えて、発表内容を丸投げしているありさまで、知識不足、指導力不足を痛感した。そこで、教材研究の卒業研究を兼ねて、年月をかけて教材研究を行い、体系的なプレゼンテーション教材を作成した。

体系的教材が完成するに従い、私の満足度は高まったが､内容が複雑で膨大になり、講義形式で紹介すると、学生の理解困難度が高まっていくというジレンマが生じた。

そこで思い切って、学生に発表させる形式にした。これはその後全学 FD 研修で学んだ TBL（team based learning）の手法に通じており、他者に教えることで知識の定着度が高まるというものである。

その場合に、膨大で奥が深い内容であるので、受講生がゼロから調べて作り上げるのは困難と判断し、すでに作成した教材を叩き台として提供し、重要な骨子を把握させ、自分がわかりにくいことはさらに調べてわかりやすく説明できるようにすること、最新情報を入れること、最後にまとめ問題を作成することを求めた。学生の中には、叩き台を基に、修正する程度で発表することはやりにくかったと事後報告してきて、自分がゼロから作ってみせると言った学生がいて期待したが、提出することはなかった。

・見られた教育効果

この方法で学生が発表する形式にすると、多くの学生は、自分の担当のテーマについて、意欲を損なわない範囲で、自学し、他者にわかるように発表する工夫をして、発表するのも、聞くのも、楽しいという意見が増えるようになった。はじめは、これが（自分でゼロから構築しないことが）教育といえるだろうかと懐疑的に思ったが、このようなやり方にも教育効果はあるようで、何より学生が喜んで学ぶようになった点は

評価せざるを得ないと思うになった。そして、それなりに学生は授業内容を理解し、得るものがあるようであるという手応えを感じるようになった。

＜授業のスケジュール＞は、以下の通りである。
第１回　ガイダンス、主食とは
第２回　主食の重要性、稲作
第３回　糖尿病、ダイエット
第４回　世界の人口・食料問題、緑の革命とその後
第５回　貿易交渉、食料自給率
第６回　農薬
第７回　農業（近代農業、有機農業）
第８回　今治市有機農業生産者の講義
第９回　食料生産と環境問題の相互作用
第 10 回　遺伝子組換え
第 11 回　日本の食生活史
第 12 回　外国の食生活史（欧州、中国）
第 13 回　食育、学校給食
第 14 回　総括１　社会的ジレンマ解決への社会行動学からみた可能性
第 15 回　総括２　歴史から学ぶ食文化のあり方、人口食料問題解決の方策と課題
最終レポート（テーマ：授業内容でさらに深めたいテーマを選んでレポートし、自分の考えを自分の言葉で述べよ。）

・授業の進め方と学生の学び
最初の３回と最後の２回は授業担当者による、第８回は外部講師による講義、それ以外の９回は、学生によるプレゼンテーションと質疑応答形式で行った。
学生によるプレゼンテーションは、テーマを選ばせ、毎回の資料形式に統一性をもたせることを重視して、授業全体の体系がわかるようにした。すなわち、目次と各画面の見出しの統一性、文献、内容構成は、テーマの現状と問題→原因と対策→まとめの穴抜き問題の順で整えさせた。
また、聞き手に興味関心を喚起する方法としてクイズを入れたり、写真や図表等でわかりやすくする工夫を指示した。また、発表時には、相手の目をみて話し、相手の反応を確認して速度を加減するよう、その場で学生に指示をすると、話し方のコツをつかんでいく様子が見られた。

２．授業内容の評価

Moodle で授業評価アンケートを行った。有効回収率は 83%であった。結果を以下に示す。

回答者数 10（数値は%）	大変良い	まあ良い	ふつう	不良	全然不良
知的おもしろさがあったか	70	30	0	0	0
得るところがあったか	60	40	0	0	0
意欲的に取組めたか	50	50	0	0	0
教員の説明はわかりやすかったか	60	20	10	10	0
資料や教材はよかったか	60	0	30	10	0
moodle 課題の内容や量が適切であったか	60	30	10	0	0
書籍等でよく自学したか	10	50	30	10	0

授業の難易度	適切	もっと易しく	もっと高度に
	80	10	0

数値的には、私の他の授業と同程度である。

以下に、アンケートの自由記述を紹介する。
・知的おもしろさ、わかりやすさ
知らないことが多く、食に関わる幅広い知識を得ることができた。
有機農業の外部講師の講義を聴けたのは大変充実した時間だった。農業の当事者から熱のこもった話を聞くことができ、授業を受けて良かったと強く感じた。人生観も参考になった。

・授業形態
先生が講義するだけの授業と違い、友達が詳しく調べてわかりやすく発表してくれるので、普段以上に授業内容が頭に入った。自分の発表の際にも、他の人に伝えなければいけないということで、より深く研究でき、勉強するのが楽しかった。
パワーポイントは、先輩方のそれを基にして作ったので、自分のわからないところや付け足したいところ、最新情報に直すくらいだったのでやりやすかった。
配付資料に統一感があったのでよかった。（目次と各画面の見出しの統一性、文献、内容構成（現状と問題→原因と対策→まとめ問題））
発表の最後に、振り返りの時間（まとめ

問題）があるのが、わかりやすくてよかった。

今回の授業のプレゼンの準備が大学生活で最も大変だったが、とてもやりがいがあった。

プレゼンテーションや、自分の考えを人に伝える練習になり、卒業研究や就職活動でも役立つと思う。

・教員の説明

学生の発表ではわかりにくいところを詳しく丁寧に説明してくれた。

先生の授業は何科目か受けているが、毎回話し方がゆっくりでわかりやすい。ビデオを用意してくれ、見ながら説明もしてくれるのでとてもわかりやすい。

もう少し早口の方が聞き取りやすい。

先生自身が楽しそうにわくわく説明しているのが伝わったので学生の意欲につながったと思う。

・授業の感想

以下に、1 人の受講生の感想文を紹介する。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

本授業から多くのことを学ぶことができた。特に 3 つのことについて述べる。

まず、他の人の発表を通して知らない分野での知識を得ることができた。今まで、生活環境コースに所属してきて、家庭科の食という分野の知識をある程度把握していると思っていた。しかし、この授業を通して「食」という分野の広さを知ることができた。特に、農業や遺伝子組み換えなどについては生物の要素が強くあったり、食糧問題については世界の情勢や人口問題、貿易などについてまで深く関わりがあったりするのだということを知り、とても驚いた。それらの広い食分野の知識を得ることができ、幅広い知識とその存在を知ることができたことは、私にとって有意義な時間であった。

また、この授業は「食」という身近で生活に深い関わりのある内容で、日常で役に立つような内容も多くあり、日常的に食について関心を持つようになった。特に、「農業」と「農薬」、「遺伝子組み換え」などは日々の生活に直結する内容で、買い物をするときの表示などに注目するようになった。今まであまり見ずに買っていた自分が少し怖いなと感じ、家族に紹介したりした。このように、周囲に広めていくことも大切だと強く思った。

最後に、自分が発表を行うことで得た学びについて。今回、私は「農薬とその危険性」について「なぜ農薬を使うのか？」という根本的なことから、日本や世界の環境問題についてまで広げて「農薬」というテーマ 1 つで学ぶことができた。テーマについて調べ、まとめ、発表する活動は、いただいた資料をただ読むだけでなく「自らで」調べ、理解し、付け加えたりしていくため、農薬についてのより深い理解と興味・関心につながったと思う。実際に農薬について調べていく中で、愛媛県の祭りである西予市城川町の「実盛送り」について知ることができた。地元の祭りであっても知らないものは多いため、この機会に知ることができて、地域のことについても目を向け、知ることが大切だと気付かされた。

この授業を通して、様々なことを学ぶことができた。現在の人口増加から、食料の持続可能な生産というものが大切だと強く思った。そのためには、環境に配慮した農業や農薬の使用、そして貿易についても考える必要があると思う。農業や食の歴史から、過去の農法や調理法などを再度取り入れていくことも、大切なのではないかと考える。「今の食」と「昔の食」から「未来の食のあり方」について考えていくということが、今回の授業を通して考えられたと思う。また、身近な食についても興味関心を持つキッカケができた。「自分一人が変わっても意味がない」ではなく、みんなが、自分一人から変えていこうとすること、そして自分から広めていこうとすることが重要であることを胸にこれからも自分を顧みていきたいと思う。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

学生の反応レベルは様々である。多くの学生が学ぶことを楽しいと感じて取り組み、時々このように、こちらの意図を理解してくれる学生の反応に出会うと、まずますだと感じる。しかしこれは妥協の産物であって、願わくば、学生が楽しいというレベルが、わかりやすく概観できたのが楽しいレベルから、深く追究する面白さにとりつかれる、本来の学究者の姿勢になることを、夢見続け、時々そういう学生に出会えたことが宝であった。

３．地域社会を核とした教育と研究のつながり

これについては、カリキュラム構成として、まず基礎知識の習得をしっかり図ることが先決だと考える。

あくまでもその大原則を重視した上で、地域をフィールド対象とした研究を授業で紹介するならば、学生が地域の事象を科学的視点で捉え、将来的に、地域の課題に取り組むきっかけづくりになると考える。

本授業では、私が行った愛媛県および全国の学校給食の調査研究の結果や、食育の実態等を具体的に紹介した。また、地域の実践家（今治市有機農業と学校給食）を外部講師として招き、当事者として実践を紹介していただいた。

その結果いずれも、学生の関心度は極めて高く、それらが卒業研究や就職活動につながったケースもこれまでに見られた。

同様のことは、他の授業でもおこなってきた。環境教育の授業では、地域の河川の水質調査、ゴミ分別や処理場の見学、それらに関連づけて政策とその効果を整理して論じることは、学生にとって、地域の生の素材を通して、具体的なものの考え方を身につけ、考えさせる絶好のチャンスとなったと思う。

楽しい授業を､来年度までで 42 年間させていただくことになります｡感謝しています。